

『建築夜話（清水一）』にみる 住まいと住まい方についての一考察

日大生産工（院） ○金丸 悠紀子
日大生産工 浅野 平八

1 研究の背景

日本の住まいは明治以降、開国と第二次世界大戦敗戦という大きな転換期を二度経て、大きく変化した。

開国後、西欧文化が流入し、富裕層は洋風の住まいと和風の住まいの両方を一軒に持つようになり、住まい方は急激に変化した。また、西洋文化が優れているという考え方から、西洋の模倣のような住まいが多く建てられていった。

藤井厚二は著書『日本の住宅』（1928年）の中で

「日本の住宅として特色のある建築の出来ないことは実に大きな恥であると思うので、一日も早く日本固有の環境に調和し、私たちの生活に適応する文化住宅が創造せれることを熱望してやみません。」^{*1}

と述べている。また、実験住宅として自ら住まいを建て、科学的に分析することで、西洋の模倣でない日本の気候風土に見合った住宅を模索した。このことは、多くの文献で明らかにされているところである。^{注1}

戦後復興期では、住まいが圧倒的に不足した中で、小野薫氏、河野通祐氏らの手によって『生活と住居』が出版された。これは、建築家がものを建てられなかった時代に、生活と住居の合理的な一体化を目的とし、住まい手に向けて発信されたものである。そこでは、住宅の規格化、住まい方、家事・育児・労働の軽減、児童福祉、共同施設などの問題が提起されている。このことについては、筆者の先行研究で明らかにしたところである。^{注2}

現在では、住まいの主要な機能の一つであった身分表現や接客を第一とする形は薄れ、家族の生活や個人の生活が住まいの主要な機能になっている。さらに、暮らし向きが豊かになり、住まいに求めることが多くなったことで、住まい方は多様化・複雑化しており、前掲の藤井厚二の要求には応えられていない。また、日本固

有の住まい方についての模索が見られる現代^{注3}にこそ、自分勝手に住まうのではなく、日本の気候風土と生活文化に見合った住まい方の指針を見つけるべきではないかと考えた。

2 研究の目的と方法

本稿では、住まい手に多くの情報を発信した一人である、清水一氏の考え方を知る貴重な資料である『建築夜話』（1960年代～1970年。日本短波放送録音テープ）を復刻し、分析資料とする。

1960年代、高度経済成長期の住まい方を考察することから住まい方の系譜をたどり、現代住居の指針を得ることが本稿の目的である。

2-1. 建築夜話について

『建築夜話』は、1960年代から1970年に日本短波放送にて対話形式で放送された。清水一、丹下健三、アントニン・レーモンド、村野藤吾などの著名建築家に対し、若い作家や彫刻から聞き役となり、建築についての思いが語られたものである。対談相手が専門の建築家ではないため、一般ユーザーに向けたわかりやすい言葉で話されており、公式な歴史に記録されていないような、些細なエピソードもあるため、貴重資料といえる。

このラジオについては復興版が出版されているが、1962年出版で、清水一氏が出演されているものは含まれていない。

2-2. 清水一氏について

清水一氏は、東京帝国大学を卒業後、今の大成建設に就職し、設計部長を経て日本大学生産工学部の教授になられた。大成建設在籍時には、ホテルニューオータニ、帝国ホテルなどさまざまな有名建築に参加された。（表1）

A study on residential and life style in the data about Shimizu Hazime
Yukiko KANAMARU, Heihachi ASANOI

さらに、建築専門家から住まい手へのメッセージが少ない中で、『すまいの四季』や『人の子にねぐらあり』などを執筆され、その書を通じて住まい手に多くの情報を発信した1人である。そのような意味でも、住まいや住まい方を考察する上で、重要な位置にある人だと考えられる。(表2)

表1. 清水一氏の略歴

年	月	略歴
1926	3	東京帝国大学工学部 建築学科卒業。
1938	4	大倉土木株式会社（現 大成建設株式会社）入社。
1963	5	退任、顧問となる。
1965	4	日本大学生産工学部 教授になる。
1978	3	永眠 従五位勲四等瑞宝章を授与。

表2. 清水一氏の著書

年	出版社	タイトル
1933	常盤書房	高等建築学 第14巻 建築計画
1950	立出版	建築実用便覧 編集
1952	彰国社	建築史技術全書 第1巻 設計製図・計画共著
1954	文芸春秋社	人の子にねぐらあり
1954	井上書院	建築インデックス 共編
1956	暮らしの手帖社	すまいの四季 日本エッセイスト・クラブ賞
1956	ダヴィット社	窓のうたとそと
1960	暮らしの手帖社	家のある風景
1960	淡交社	京の民家
1963	世界書院	対談日本建築と工匠たち
1963	講談社	新住宅入門
1965	井上書院	すまい今昔
1966	暮らしの手帖社	句集匙
1967 -1968	井上書院	随筆集その一～三
1969	大成建設	社史・大成建設の歩み 1945-48 編集
1970	井上書院	すまいと風土
1972	井上書院	私の建築辞典

2-3. 1960年代の住宅問題

『建築年鑑』1961年版の住居の中で、濱口隆一氏は

「一戸建住宅の設計において、“行きづまり”ないしは“無政府的”な状態が現出することになった。また、技術革新・社会情勢・過大都市の土地問題などの諸動因によって揺られて、“行きづまり”といわれながらも、しかしそれでも住宅に愛情を持ち続ける、かなり多くの建築家たちのそれぞれの主張を織り込んだ【複雑怪奇な混線的図柄】をせしめている。」^{*2}
と述べている。

1960年代は、住宅不足は依然として解消されず、住まいにおいては、その設計についての、主導的な方向性や価値基準といったものが見失われていた時代であった。

3 考察結果

『建築夜話』では、清水一氏は住まいと住まい方について話している。抽出項目は以下の7項目である。

- ①玄関 ②床の間 ③窓 ④電気設備
⑤台所 ⑥寝室 ⑦飾り

3-1. 玄関

かつて玄関というものは、私生活における格の表現の場であった。また、民家の玄関には土間があり、そこから上がったところに畳が敷いてあって、来客時にはそこで対応するという「小さな応接間」的役割があった。

しかし、戦後、玄関はその「小さな応接間」的役割が排除され、靴の脱着が出来る必要最低限度の広さしかないものが増加し、現在では、玄関がない住まいまで存在している。

清水一氏は、当時の玄関が“格の表現の時代”からの反動で非常に小さくなってしまい、多人数の場合や玄関先で来客に対応できないことに触れている。また、玄関は個人生活と社会との接点であり、家に靴を脱いで上がるという習慣がある以上、玄関だけは日本独特の解決策を考えなければならないとしており、さらに、昔の応接間的な役割をもつ玄関を、現代の玄関にも用いることで、混合ではなく日本特有の玄関が出来るのではないかと述べている。(図1)

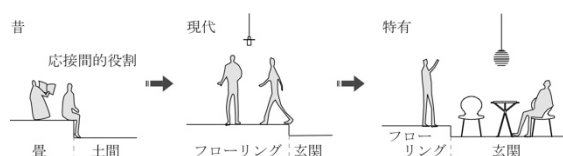


図1. 玄関の変遷と案

3-2. 床の間

床の間は、他に装飾的要素がない日本の住まいの室内において、室内衣装を左右し、意匠の上でも非常に意味のあることであった。また、造り付けの額縁のような役割があり、季節の移り変わりを感じるため、それに応じて、心になったものを掛け、並べるといった柔軟性があり、さらに機能的性格の場であった。

しかし、当時は住まいが狭く、大半の家庭が掛け軸を持っていなかった。そのため、床の間に箆箆や荷物を置くことが多かったことから、必要性が疑問視され、一般家庭の中で床の間が消えてなくなりつつあった。

氏は、昔の部屋は障子や襖で囲まれ壁がなかったため、床の間の背中の壁だけでもあると部屋が落ち着くものであると述べている。さらに、床の間のない部屋は合宿所のようなものであるとしながら、当時の荷物置き場になってしまってしまうという問題を解決するために、その室との調和を考えながら、奥行きを50－60cmにすることや、掛け軸を飾らなくて済むよう、途中から棚にするなど、従来の床の間から現代の床の間への転換を述べている。

3-3. 窓

江戸時代には窓に税をかける大名もおり窓は比較的小さく、また、縁側や障子によって室内には間接的な光が取り入れられてきた。

しかし、近代建築のあおりを受けるようになると、住まいの窓も大きくなり、直接光が室内に入ってくるため明るくなった。

氏は、窓が大きくなったことに対して、連続する水平窓を用いると、壁が不足してしまい絵画装飾できないことや、天井までの垂直窓を用いると遮蔽する方法がないこと、窓が多すぎると熱が逃げってしまうことなど、欠点を述べている。(表3)また、当時はガラスの技術が発達していなかったため、強風でガラスが割れ、破片によって負傷者が出たことを例にあげ、雨戸の必要性も訴えている。

表3. 大きな窓の欠点

窓	欠点	備考
水平窓	壁面の不足	絵画などを飾る、装飾場所が不足する。
垂直窓	遮蔽性の低下	寝室に設けと、安眠の妨げになる。
面積増加	断熱性の低下	ヒートロスが起こり、暖房の効率が悪い。

3-4. 電気設備

電気設備が発達してくると電気器具が増加し、電気配線やコンセントの位置などの様々な問題が発生した。

氏は、新築で電気設備を考える際は、まず、一日の生活を頭の中で描き、その生活と電気器具を結び付け、それをどのように解決するかを二段構えにして考える。次に、日々の暮らしの中で、どのような電気器具を使用しているかメモしていき、最小限度、普段使用しているものを知る必要があるとしている。また、居住性の高い場所ではコンセントは二連のものを使用して、床面に設置することで部屋の自由度が増すとしている。

電気設備の発達の欠点としては、電気器具が必ず発熱するため、それによって家の中の温度が上がり、冬は住みやすくなるが、それは人間だけでなく、鼠や虫にとっても住み良い家になるということを述べている。

3-5. 台所

戦後、台所は向上した。昔、窯で食事の支度をしていた時代は、女性は座って料理をし、時代がなれるにつれて中腰になり、さらに、現代ではたって料理をするようになった。また、ステンレスが普及するなど、材料面においても向上し、非常に衛生的になり合理化された。

氏は、台所の向上は女性の地位の向上と一体である(図2)とし、さらに、台所の平面的な位置(方位)も考察している。また、将来、台所は主婦の部屋と考えられるようになり、加えて、バルコニーとキッチンを隣接させることで、家事をしながら子供の様子を見られるようにすることで、家事育児の軽減につながると述べている。

さらに、ダイニングキッチンが合理的になったことに対し、当時の住まいが、台所の一部に食堂がある住まいか、食堂の一部に台所がある住まいかのどちらかになっていることに触れ、問題提起をしている。また、台所の一隅で食事をしている感覚を持っている人が多かったことから、それを取り除くことを考えなければならぬとしている。

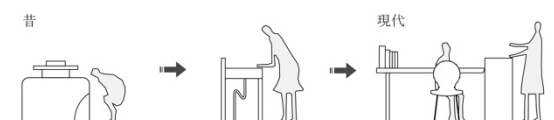


図2. 台所の向上

3-6. 寝室

就寝分離により、寝室が独立した。座敷を様々な用途で使用していた時代とは異なり、夫婦の寝室が独立したということは、ただ寝るだけでなく、そこにその夫婦だけの生活が生まれたということであり、プライベート空間が保たれるようになったということである。また、ベッドが流入していたことにより、住まいの中の響きが軽減され、衛生的にも向上した。

氏は、寝室が独立し、プライベートが保たれるようになったことで、寝室が家庭用の金庫置き場になっている住まいが増えたことから、寝室には頑丈なドアを設け、さらに鍵を掛けられるようにし、切り替えの電話をつけるよう工夫するなど、泥棒対策が重要になってくると述べている。また、住まいには必ずガス、水道、電気、電話があることに触れ、電話の発達が諸外国と比べて圧倒的に遅れていることから、機能面でもデザイン面でも、これから急激に発達していくであろうとしている。

3-7. 飾り

現在、季節のものを飾る棚や場所が少なくなったことで、季節感がない家が増加した。

人は昔から、太陽や月のリズムを、季節や月日などを知る手がかりにしてきた。日本の季節には、太陽暦の一年を四等分した春夏秋冬のほかに、二十四等分した二十四節気、さらに七十二等分した七十二候があり、こまやかな季節の移ろいまでが取り入れられてきた。そもそも飾りというものは、ふと気がつけば変化していく季節の片鱗をすまいの中に留めて、その佇まいの中に季節を感じることに意味がある。^{*3}

氏は、合理主義で建てられた住まいは季節感がなくなってしまうとしている。また、具体例として、正月飾りや神棚に触れ、門松やその後の鳥総松がコンクリートで舗装されたため、穴があけられず、飾れなくなってしまったことや、飾りや神棚に興味がない家庭が増加したことを問題視しており、門にあらかじめ門松用のフックをつけるよう設計するなど、飾りをする場所を減らさない工夫を述べている。さらに、当時は大半が狭い住まいで飾り専用の棚を設けることができなかったため、普段は普通の棚として使い、飾りが必要な時だけ片付けてそこに置くなど工夫することが大切であるとし、飾りをするということは、きれいに片付けるところから始まると述べている。

4 まとめ

清水一氏は、住まいにおいて、その設計についての主導的な方向性や価値基準といったものが見失われていた時代に、和風・洋風のどちらが日本に適しているかということではなく、住まいや住まい方がどうあるべきかを考え直し、日本の気候風土と生活文化に見合ったものにしていくことが大切であると住まい手に述べていることがわかった。

また、季節感について多く語っており、日本の特徴である季節を大切にし、それを取り込むような住まい方や、付き合い方をする中で日本の生活文化に見合った住まい方が生まれることを示唆している。

5 今後の課題

現在、日本の一般的な季節は春夏秋冬だが、昔の人々はさらに細かく分類した七十二候を季節とし、その中で旬のものや祭りごとを楽しみ、自然と寄り添うようにして生活してきた。現在でも桃の節句や端午の節句などの名残がある。しかし、電気設備が発達していくなかで、住まい方の中に季節感がなくなったように感じる。

そこで、日本特有の季節に着目し、その季節に寄り添った住まい方をもう一度見直すことで、日本列島の気候風土と生活文化に見合った住まい方が見つけられるのではないかと考える。

今後の課題としては、人々の住まい方の中でこだわりをもっている季節感についての聞き取り調査をして、実態を明らかにすることがある。

参考文献

- ・藤井厚二，松隈章解説『日本の住宅』柏書房（2009年）
- ・主宰：小野薫，編集長：河野通祐『生活と住居』誠文社（1946年 - 1948年）
- ・松田妙子『家をつくって子を失う』財団法人 住宅産業研修財団（1998年）
- ・『住宅全書』
- ・水沢朝江，水沼淑子『日本の住居史』吉川弘文館（2006年）
- ・吉田鉄郎『日本の住宅』鹿島出版（2002年）
- ・文：白井明大，絵：有賀一広『日本の七十二候を楽しむ』東邦出版株式会社（2012年）

引用

- *1 藤井厚二，松隈章解説『日本の住宅』柏書房（2009年）p43
- *2 編集：建築年鑑編集会議『建築年鑑 1961年版』美術出版社（1961年）p153
- *3 佐藤年『俵屋相伝』世界文化社（2012年）p2

注釈

- 注1. 松田妙子『家をつくって子を失う』財団法人 住宅産業研修財団（1998年）
- 注2. 金丸悠紀子，戦後復興期の居住空間に関わる諸問題，日本建築学会大会学術講演会（2012年9月）
- 注3. 真の日本のすまい提案競技，住宅産業研修財団（2003年～）